# 狭衣物語

## 下

鈴木一雄　校注

新潮社版

新潮日本古典集成（第七四回）

狭衣物語（さごろもものがたり）下

昭和六十一年六月五日　印刷
昭和六十一年六月十日　発行

校注者　鈴木一雄（すずき かずお）

発行者　佐藤亮一

印刷所　大日本印刷株式会社

発行所　株式会社　新潮社

〒一六二　東京都新宿区矢来町七
電話　東京03（二六六）五一一一（業務）
東京03（二六六）五四一一（編集）
振替　東京　四一八〇八

装画　佐多芳郎
組版　シーティエス大日本
製本　加藤製本株式会社

定価二三〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Kazuo Suzuki, Printed in Japan, 1986.

ISBN4-10-620374-X C0393

# 目次

凡例……三
巻三……七
巻四……一八五
解説……三七五
付録
校訂付記……三九七
狭衣物語年立……四〇五
狭衣物語系図……四三一

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# 凡例

一、本文は旧東京教育大学国語国文学研究室蔵『狭衣』春夏秋冬四冊本を底本とした。同写本は流布本系統の比較的善本で、室町時代末頃の書写にかかり、元和九年（一六二三）開板の古活字本に最も近く、それよりやや前に位置する。

一、本文は底本をできるだけ忠実に活字化することに努めたが、変体仮名を普通の仮名に、仮名づかいを歴史的かなづかいに統一したほか、適宜に段落を分けて改行し、仮名に適宜漢字を宛てたり、句読点や会話符号を付するなど、底本の表記を読みやすく改めてある。

一、底本の明らかな誤写と考えられる個所は、他本などによりこれを改めたところがあるが、できるかぎり底本本文を尊重した。やむを得ない訂正は、これを「校訂付記」のかたちで示した。

一、傍注（色刷り）は主として現代語訳を、頭注は主として説明および和歌の解釈を示したが、スペースなどの関係で便宜に従ったところも多い。傍注において、本文にない言葉を補った場合は「　」印を、会話の話者や心中思惟の当該人物を示す場合は（　）印を付した。なお頭注で紹介した和歌のうち作者名を記してないものは読人知らずの作である。

一、傍注の現代語訳や頭注の和歌の解釈は、原文の表現性を過不足なく伝えるとともに的確な現代語訳であることを念願し、かつ努めた。

一、頭注欄に、比較的小刻みに色刷りの小見出しを掲げた。これに添って検すれば梗概が辿れるよう工夫したつもりである。

一、巻末の解説は、『狭衣物語』の基本的な構造と、『源氏物語』の影響の意義について述べ、上巻解説の補いとした。

一、付録に、「狭衣物語年立」「狭衣物語系図」を添えたが、「年立」には主人公狭衣大将の「述懐」の個所を加えたり、構成面の特色を下欄に表示して、この物語の特色を示すよう工夫した。「系図」は下冊用のものである。

一、本書は、上下二冊に分冊したが、上冊には底本の「春」「夏」を通行の巻一、巻二としてこれを収め、下冊には底本の「秋」「冬」を巻三、巻四として収めた。

一、本書二冊の本文の整理や清書などに、美谷一夫、身崎昌子、上丸恵都子三氏の援助をいただいた。しるして感謝の意を表する。

# 狭衣物語 下

# 卷

# 三

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一「み山」は高野山をさす。「み山の里」で、その山麓、いま狭衣一行の籠る粉河寺付近を言う。「霰ふるみ山の里のわびしきは来てたはやすく訪ふ人ぞなき」（『後撰集』冬）を踏む表現。

二「岩間には氷の楔うちてけり玉ゐし水も今は漏り来ず」（『後拾遺集』冬、曾禰好忠。『好忠集』は下句「漏り来し水も絶えて音せず」）に拠る表現。

巻三の巻頭――狭衣大将、出家の意志と現世の愛に苦しみつつ下山する

三「やられ」の「れ」は可能の助動詞。

四 古色蒼然としたたずまいや枝の張りぐあいなどがいかにも無気味な雰囲気で。

五 狭衣大将の理想的な美しさに心惹かれて取り憑く魔物があるかも知れないと。

六 谷が深いので立ち枯れてしまった古木、枝も葉もないあの姿こそ私自身の姿なのだろうか、それで源氏の宮に恋い焦がれて思わぬ時とてない私の心も、誰に知られることもなく朽ち果てて終ってしまうのだろうか。「をだまき」は、枝も葉もない立ち枯れの木。なお上巻一〇頁注八参照。

七 狭衣の心には何よりも先に源氏の宮が思い浮ぶのである。

八 源氏の宮と添うべくもない今、このまま深山に籠り、出家遁世の素志を果したいというのである。

一（深山の籠）（閑の寂しさは）

み山の里のさびしさは、げに、さを鹿の跡よりほかの通ひ路もまれなりけるを、夜の程にいとど閉ぢ重ねてける氷のくさびは、足も（つた跡も稀なところへ）いよいよ厚く張りつめてしまった二氷の道には（狭衣大将は足もとられて難渋し）いみじく堪へがたくて、三歩みもやられたまはず。底ひも知らず深き谷より生ひ出でたる木どもの、根の苔がちに、四うちもの古りたる気色、枝さしなどうとましげなるに、五苦しうて寄り居させたまへる御顔の色あひ、気色など、山の中にも目とどめたてまつるものやあらむと、ゆゆしきまで見えたてまつりたまふ。

（狭衣）六

谷深み立つをだまきは我なれや
思ふ心の朽ちてやみぬる

例によって何につけても七真先に源氏の宮のことが思い出されるにつけ

例の、事にふれてまづおぼし出でらるるに、これより山深くも入り

（古歌のとおり鹿の足跡のほかには）（人の通）（根元のあたりは苔におおわれて）（容易に歩くこともおできにならない）（底も知れない奥深い谷）（疲労困憊して寄りかかるようにお休みになって）（不吉な予感におそわれるまでに美しくお見受けする）（いる大将殿のお顔色といい容姿といい）

八更に山深く籠って

一　堀川関白夫妻の狭衣を思う親心は常のことだが、ここは特に、狭衣の高野、粉河参籠の旅立ちを案じていることを言う。上巻二四六頁以下を承ける。

二　自分が出家遁世した際にどんなに父母がお嘆きになるか、狭衣には両親の悲嘆が今から予想されて。「あらましごと」は、あらかじめ予想される事、の意。

三　源氏の宮が、「お兄様がそんなお心とは思いも寄らなかった、いや、嫌い」と、悲しく思い込まれたあの時その折のご様子は。

四　「おしあけがたの月」は、「天の戸をおしあけがたの月見れば憂き人しもぞ恋しかりける」（『新古今集』恋四）に拠る表現。本歌では「天の戸をおし」が序詞、「押し開け」の「開け」と、夜の「明けがた」の「明け」の掛詞で、「明け方の月」（有明の月）を導く。ここは「おしあけがたの月」に、本歌の歌意をそっくり籠めている。『源氏物語』（賢木）にも「なほ、憂き人しもぞと思し出でらるるおしあけ方の月影に」と引かれている。

五　恋しさも辛さも同じあの人（源氏の宮）ゆえ、結局は恋しさに負けて出家もならず、涙ながらに山を下りていくこと

狭衣、昨夜の僧に再会できず　妹－諦観遁世のはざまに苦しむ狭衣の独詠歌。

六　昨夜の修行僧。飛鳥井女君の兄。上巻二五一頁。

七　狭衣大将のお側去らずの郎等。大弐の乳母の三

なまほしきに、うしろめたくわりなしとおぼしたりし御気色どものしまいたいお気持だが一不安で仕方がないと狭衣の身を案じておられた御両親のお姿が思ひ出でられて、「いつしかとおぼすらむに、行方なく聞きなした（狭衣心）一刻も早く帰京してほしいと思っておられるだろうに私が更に山深く消え失せたとお耳にされたらまひて、いかばかりおぼし嘆かむ」と、思ひやらるるあらましごとに、あぢきなく涙も落ちぬべきに、不覚にも涙ぐんでしまいそうだがまたうち添へて、「思はずに憂し」とおぼしたりし折々の御気色は、おしあけがたの月ならねど、つれない故に却って恋しい訳ではないがよろづにすぐれて恋しく思ひ出でられたまふに、いとど道も見えぬまでかきくらされたまふ。

（狭衣）五

恋しさもつらさもおなじ絆にて

泣く泣くもなほ帰る山かな

など、他事なき御心のうちながら、からうじて下山に歩みつきたまへるにぞ、いつしかと奉らせたまへる御迎への人々参り集まりたる。

源氏の宮を思うお心でいっぱいのまま一刻も早い帰京を願って遣わされたご両親からのお出迎えの人々が参集していたさるべき若上達部、殿上人など、おくらかさせたまひてける恨めしさの代はりに、われもわれもと競ひ出でて、吉野の川の所もなきまで心あわたたしくなりぬれど、ありし山伏、今朝尋ねさせたまへ

今度の旅に加えていただけなかった恨めしさの埋め合せに我も我もと先を争ってお迎えに集まりりの有様に狭衣の身辺は気忙しくなったが麓にたどり着か埋め尽すばか使の者をおやりに

男。巻二初めから活躍している（上巻一二八頁初出）。

ヘ 狭衣の帰京の出立にやっと間に合った道季から修行僧の様子をお聞きになる意であろうが、文脈が飛躍しすぎてわかりにくい。古活字本、整板本も同じ。ここは「からうじて参りたれば、人なき方に召して問ひ給」とある深川本ほかの本文がよい。

ト 修行僧がここ数日籠っておりました三昧堂もすっかり引き払って。上巻二五一頁参照。「候ふ」は、改まった丁寧語。

一〇 明り障子に昨夜のお召物を掛け残しておりました。「紙障子」は、「襖障子」に対する。明りを取るために紙を張った障子。「明り障子」とも言う。平安時代の寝殿造りの建物では襖障子（唐紙）が普通だが、寺院や山荘などには比較的早く紙障子が用いられている。ここは衝立の類とも言われる。「御衣」は、主人（狭衣）への敬意をこめた言い方。狭衣が僧に、寒風を防げと与えてあった衣服である（上巻二五四頁参照）。

一一 修行僧の妹で幾月もずっと患っておりましたのが。飛鳥井女君のことである。「はべり」は、居合せた僧の、道季への丁寧な言い方。

一二 妹が死んだら。「死なば」は、下の「いかがすべからむ」にかかる。百日の勤行の果て近くではあり、兄僧も心が迷うのである。上巻二五三頁参照。

一三 兄僧の別れ際の約束「出でさせたまはむに、かの御堂のかたに尋ねさせたまへ」を承ける。上巻二五六頁参照。

なったところ　取り込みに紛れて　お会いできないままになってしまったので

ば、もの騒がしくて、え会ひたまはずなりぬれば、「かならず尋ねて参り会へ」とて、道季を留めたまへる、待ちたまふとてやすらひたまふに、からうじて問ひたまふに、「この日頃候ひける所も取り払ひて、紙障子に昨夜の御衣をなむ掛けて候ひつる。籠りて侍る僧どもに問ひさぶらひつれば、妹の月頃わづらひはべりけるが、限りになりたるよし告げにおこせて侍れば、『夜のあひだ候はむ。もし死なば、後のあつかひも見ゆづるべき人もなきを、いかがすべからむ。よろしげならば、やがて帰りなむ』と申して、夜中にまかり出でにける。その行き所などは知りたりと申す人候はず」と申すに、口惜しなども世の常なりや。

尋ねましたところ　危篤に　（修行僧）せめて夜の間看取ってやりましょう　容態を持ち直すようなら　すぐに帰山しましょう　行先などは　お会いしてこい　粉河に残しておられたのを　（道季）

狭衣大将のお気持は残念とも何とも言いようがない

「昨夜、などいますこし問はずなりにけむ。『暁に召せ』と言ひしかば、心やすくて、行ひも紛れがまし、人目もいかが」など、心のどかに思ひしも悔しく、いみじとも世の常のことをこそ言へ、いとど都のかたのもの憂さもわりなけれど、「出でさせたまひにし後、

どうしてもう少し詳しく尋ねておかなかったのだろう　修行僧が　安心して　勤行の妨げになっても悪いし　人目も憚られる　後悔されて　残念とも無念とも言いようのない思いにかられると　（人々）大将殿のご出立以来

一 斎院源氏の宮への熱い思いを心に秘めて、舟で帰京の途につかれたが、その間。「堀江こぐ棚なし小舟こぎかへり同じ人にや恋ひわたりなむ」（『古今集』恋四）に拠る表現。

二 出家を果せぬ苦悩やら飛鳥井女君の病状への気遣いやらが交錯して、胸の鬱積の解けるときとてない。「胸の関路」は歌語的表現。胸のうちが憂えに閉ざされているのを言う。

帰途の舟旅 ― 楽しげな一行の中に狭衣大将ひとり身の憂さを思い嘆く

三 櫂の雫で袖がびっしょり濡れるのもかまわずに。「櫂の雫」は歌語的表現。「しほどけさ」は、びっしょり濡れている様子。

四 漕ぐ動作を繰り返しながら。舟人の操作であろう。

五 当時の俗謡、舟唄などの一節であろう。「妹背の山」が吉野川（紀の川）の上流、下流に二つあり（上巻二四八頁注一）、この俗謡がどちらの妹背山を歌うのかは不明。

六 笛を吹く若人も舟人もそれぞれに。

七 行くにつけ、帰るにつけ、私の心に源氏の宮をよみがえらせて苦しめる妹背山よ。何とかして妹を慕わずにおれないこの思いから離れる術を知りたいものだ。「妹背」は、ここは兄妹の意を表に立てて言う。『源氏物語』（藤袴）にも、柏木と玉鬘の贈答歌に、「妹背山深き道をば尋ねずてをだえの橋にふみまどひ

堀川関白殿はお食事などほとんどお取りにならず殿、ものなどすべて御覧じ入れず、夜など、つゆばかりも御殿籠らでおぼつかながり明かさせたまひける」と口々語り申しつつ、「疾早く早く疾く」と急がしきこえさすれば、心にもあらで棚なし小舟に漕ぎ帰りたまふほど、胸の関路は隙なし。

大将殿のことばかり案じては夜明かしておられました

すこしもお眠りになることなく

狭衣大将は不本意ながらせかせ申しあげるので

笛など持たせたる若き人々ありて、折にあひたる音吹き鳴らしたる、水の上にてはいとどおもしろくをかし。また、櫂の雫のしほどけさも知らず顔に手づから漕ぎかへりつつ、声をかしうて、「あれ、妹背の山か、さはれ」と歌ひたるさまどもは、おのおの誇りかに思ふことなげなるは、なほ「我ばかりもの思はしきはなきなめり」と、うらやましく思ひわたされたまふ。

冬の季節にふさわしい音色を吹きかなでた

一段と興趣が加わって素晴らしく聞える

美声を張りあげて

得意気な様子で何

私ほど苦悩を背負う者は誰ひとりいないようだ

狭衣大将は羨望を感じつつ人々を眺めておられる

（狭衣）七 行きかへり心まどはす妹背山

思ひはなるる道を知らばや

八 避けようもないことだったが これも因縁の辛さかと心も重く沈みきって

避くかたのなかりけるも、契り心憂くながめいりて、舟の端に寄りかかりつつねぶりたまへる御まみの気色、なまめかしう見えたまふ

目を閉じておられるが その御目もとの涼しさ

いかにも優雅にお見えになるのを

ける」「まどひける道をば知らで妹背山たどたどしくぞ誰もふみみし」がある。

八　前歌を直接ひびかせた表現。妹背山を避けて通る道筋がなかった意に、源氏の宮への悲恋は避け得なかったとする狭衣の思いを重ねている。

九　「安の河原」は、高天原にあるという河。『万葉集』では七夕伝説と結びつき、天の川（銀河）の意にも用いられている。諸注は「物思はぬ安の河原に住む千鳥何を憂しとて音をば鳴くらむ」を引くとするが、この歌が本歌ならば、なんの憂えもないはずの狭衣大将の悩みの原因を、同じくなんの憂えもないのに声をあげて鳴く千鳥に尋ねてみたい、の意となる。ただし、諸注がこの歌を『古今六帖』所収とするのは疑問。出典未詳である。

一〇　湯で暖めなどして治療をして。

一一　粉河で誦経の折、普賢菩薩があらわれたことを言う（上巻二五〇頁）。

一二　狭衣大将の出家遁世の希望を言う。

一三　賀茂斎院。源氏の宮をさす。

一四　狭衣大将の心は、結局、出家遁世の志と源氏の宮思慕との間に挟まれて動きが取れないのである。

一五　「もよほす（催す）」は、せきたてる、誘い引き出す、の意。いよいよ厭世感を募らせる誘因となると言うのである。

を、もの好ましき若君達などはめでたうのみ見たてまつりたまひて、もの心細げなる御気色を、なほ「いかなる御心のうちにか」と、安の河原の千鳥にも問はまほしかりける。

嘆息をつかんばかりに魅了されて　何をお悩みになってのことか　尋ねたい思いにかられるのであった

殿には、ゆゆしきまで恋ひきこえさせたまひければ、うち見つけたてまつらせたまへるうれしさの限りなきにも、とどめがたげなる涙の気色も見たてまつらせたまふに、「たはぶれにも我が思ひよる筋はあるまじきことかな」とおぼし知るべし。雪焼けに足も腫れてなやましうおぼさるれば、ゆでつくろひなどして、歩きなどもしたまはず。けざやかなりし仏の御契りの面影恋しく思ひ出でられたまふにも、なほ「いかでこの世をさま悪しからぬさまにていとひ離れなむ」と、心のうちばかりはありしよりけにあくがれまさりて、行ひに心をいれたまへれど、斎院ばかりには、えおぼつかなきほどにもなしたまはず。さるは、隔てなく見たてまつることさへありがたくなりにたれば、この世のいとはしさももよほされたまふなるべし。

堀川邸では　ご両親が異常なまでに狭衣を恋い焦がれておられたので　無事ご帰京になった狭衣を無上の喜びでお迎えになるにつけ　溢れる涙もとどめかねておられるご様子を拝見すると　冗談にも　狭衣は身にしみてお感じになることだろう　私の出家遁世など不可能な話よ　気分もすぐれず　外出なども　まさまざと示現された　何とかしてあまり不体裁なかたちでなくこの現世から離れてしまいたい　狭衣の内心の決意だけは以前にもまして一層遁世の気持が募って　勤行にうちこまれるけれども　斎院の御許にだけは　ご無沙汰にならぬ程度に伺わずにはいられない　とは言え　神の斎垣に隔てられ斎院に直接お会いすることまで難かしくなってしまったので　この世を厭う狭衣のお気持も　更に募るといった次第なのであろう

一 苦悩に耐えかねてついには世を捨てるにしても、源氏の宮に逢えぬ嘆きは身から離れないであろう。

二 修行僧の真摯な勤行の感銘と、飛鳥井女君の兄と知った親しみとを籠めて「あはれなりし」と表現した。

三 『法華経』（巻五、「提婆達多品」第十二）に見える仙人。釈迦が過去世に国王のとき、この仙人に仕えて苦行し、『法華経』を授かったと言う。また、阿私陀の略とも。『過去現在因果経』などには、釈迦誕生のとき、出家成仏して正覚を成じる予言をしたと言う。ここでは、粉河で出会った修行僧（飛鳥井女君の兄）をさす。

兄僧遂に帰山せず　狭衣、飛鳥井女君の死を思い、法要をいとなむ

四 粉河寺。上巻二四五頁注一一参照。

五 なまじっか女君の消息を知ったばかりに、涙が溢れて滝のように流れ落ちることだ。「稲淵の滝」は、上巻一六頁注八参照。

六 飛鳥井女君の生死さえわからずにさまよっている自分に、夢でもよいから消息を教えておくれ、粉河寺で出会った兄の僧よ。「幻」は、方士、幻術士。『長恨歌』の、楊貴妃の魂のありかを尋ね当てた臨邛の道士にちなんで、飛鳥井女君の兄の僧を「幻」と詠んだもの。『源氏物語』にも、「尋ねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく」（桐壺）、「大空を通ふ幻夢にだに見えこぬ魂の行方尋ねよ」（幻）。

七 『大和物語』一五〇段の、猿沢の池に入水した采女

（狭衣）一 思ひわびつひにこの世は捨てつとも
逢はぬ嘆きは身をも離れじ

「あな、心憂や。この心ながらは後の世もいかが」（なんと情けないわが心よ　心に未練を抱いては後世のほども疑わしいと狭衣の心は平穏を得ない）とうしろめたし。

さてもまた、二 あはれなりし阿私仙（三）をさへ惑はしてし口惜しさも、思ひしようもないままに（兄僧まで行方を見失わせてしまった無念さも晴らす）やるかたなきままに、「帰り来てやある」（帰山しているだろうか）と粉河（四）に人たびたび遣はせど、「無し」とのみ言ひつつ帰り参れば、「妹のはかなくなりにけるにや」（さては飛鳥井女君は亡くなってしまったのか）とおぼすも、五 なかなかなる稲淵（いなぶち）の滝なり。

（狭衣）六 ありなしの魂の行方にまどはさで
夢にも告げよありし幻

池の玉藻と見なしたまひけん帝の思ひも、七 なかなか目の前にいふかひなくて、忘れ草（八）もやうやう繁さまさりけんを、これはさまざま夢（狭衣大将の場合は何もかも夢やら現実やらわからない有様で）うつつとも定めがたう、心をのみ動かしたまふ。（心ばかり悩ませておられる）「げにいかなる昔の契りにか」（縁があってのことか）とぞおぼし知らるる。

九 愛人の黒髪を池底の玉藻と見て嘆かれたという帝の悲しみも

「さらば、ありし暁、その夕にや消えはてにけむ」（一〇 あの明け方）とおぼせば、誰（一一 飛鳥井女君は死んでしまったのだろうか）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com